

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人金沢芸術創造財団	
施 設 名	金沢21世紀美術館	
助成対象活動名	公演事業	
内定額(総額)	4,173	(千円)
公演事業	4,173	(千円)
人材養成事業		(千円)
普及啓発事業		(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	『私は言葉を信じないので踊る』伊藤郁女	2018/8/4, 5	演目：『私は言葉を信じないので踊る』 テキスト・演出・振付：伊藤郁女 出演者：伊藤郁女、伊藤博史 舞台美術・デザイン：伊藤博史	目標値	150
		金沢21世紀美術館シアター21		実績値	172
2	『Chotto Dosh』アクラム・カーン・カンパニー	2018/8/17, 18	演目：『Chotto Dosh』 出演者：デニス・アラマノスまたはニコラス・リッチーニ（ダブルキャスト） デッシュ演出・振付：アクラム・カーン Chotto Dosh演出・振付：スー・バックマスター（Theatre-Rites） 音楽：ジョスリン・プーク 照明：ガイ・ホア	目標値	150
		金沢21世紀美術館シアター21		実績値	182
3	『珈琲時光』第七劇場 日台国際共同プロジェクトvol. 3	2019/2/16, 17	演目：舞台『珈琲時光』 企画協力：侯孝賢 脚本：王嘉明 演出：王嘉明、鳴海康平 出演者：〈台北〉Fa、圈圈〈三重〉佐直由佳子、小菅紘史、木母千尋、菊原真結、三浦真樹〈静岡〉鈴木真理子〈金沢〉西本浩明	目標値	200
		金沢21世紀美術館シアター21		実績値	261
4	他言語化対応（事業番号3内）	2019/2/16, 17	舞台『珈琲時光』（上記3）上演の際に英語字幕を実施	目標値	
		金沢21世紀美術館シアター21		実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	500
				実績値	615

## 【妥当性】

### 自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

金沢21世紀美術館は館運営の指針として次の4つを掲げています。①世界の「現在（いま）」とともに生きる美術館。②まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館。③地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館④子どもたちとともに、成長する美術館。

当館では以上のミッションに立脚した主催事業の企画立案をしています。平成30年度パフォーミングアーツ事業をプログラミングするにあたっては特に次の3点を目標に掲げました。①優れた現代の国内外舞台芸術作品を上演し、地域に豊かな鑑賞体験を提供する。②作品のクリエイションの場をつくり、創作活動を推進する。③従来の観客だけでなく、特に子どもや社会的に舞台芸術に触れる機会の少ないコミュニティへのクリエイティブなアプローチを行い、地域の創者と拡充をはかる。

今年度上演した3本の多国籍作品では、日本出身のダンスアーティストによるフランス発信の作品『私は言葉を信じないので踊る』伊藤郁女（事業1）、バングラデシュ出身のダンスアーティストによる英国発信作品『Chotto Desh』アクラム・カーン・カンパニー（事業2）、そして日本と台湾の国際共同制作作品『珈琲時光』第七劇場 日台国際共同プロジェクトvol. 3（事業3）を選出。いずれも国籍や時代を越えた視点から制作された作品であり、鑑賞を通して私たちの思考を拡充し、多くの示唆を観客に提供することができました。計画から実施に至るまでは、各々の事業に応じた協力提携先と密に連絡を取り合い、信頼関係を構築しながら、事業遂行のための努力を最後まで敢行することができました。予算、スケジュールについては計画の範囲内、そして集客数については計画以上の結果を得ることができました。交付申請書から大きく生じた変更はありません。（742字）

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

実施した3本の事業について「文化的、社会的、経済的意義」は、それぞれに継続して認められます。伊藤郁女やアクラム・カーン・カンパニーでは、夏休み中の公演の機会を捉え、こども（小学生～高校生）を対象とした工夫を加味しました。伊藤郁女は地域の児童館にてダンスワークショップを実施し、プロのダンサーから直に教えを受ける機会をつくり、日常とは異なる新鮮な体験を提供しました。その後、このワークショップに参加していた女兒は伊藤に励ましを受け、後日、金沢で実施された別作品の公演の主要な役にキャスティングされています。アクラム・カーン・カンパニー作品では小学生から高校生を対象とした貸し切り公演を実施。地域のこども劇場や児童館からの来場があり、指導者の理解も得られたことにより、その後2019年5月に実施したシアター事業にも引率者がこどもたちを連れて来場しています。また、『珈琲時光』では高校生向けの演劇ワークショップや街の書店「石引パブリック」で一般向けのリーディング・カフェを開催。いずれも、当方から出向いて機会をつくることにより、まだ掘り起こす事ができていない興味関心を引き出す機会となることを狙いました。『珈琲時光』のキャスティングでは金沢で実施したオーディションにより選出された地域の俳優が日本/台湾混合キャストに加入したことにより、国際共同プロジェクトとしての貴重な実績が今後の地域での演劇活動の展開へもたらす影響に期待しています。合わせて、石川県台湾華僑総会の協力を得て、日台のレセプション交流会や会場での台湾食の物販を実施し文化交流の一貫としての役割も果たしました。

このように、選定作品を通じた地域との継続的な関係性を構築していくことにより、創作⇄上演⇄鑑賞が循環することで持続的・継続的・有機的な舞台芸術の発展と地盤づくりを目指しています。

（772字）

## 【有効性】

### 自己評価

目標を達成したか。

平成30年度パフォーマンスアーツ事業をプログラミングするにあたっては特に次の3点を定性的な目標に掲げました。①優れた現代の国内外舞台芸術作品を上演し、地域に豊かな鑑賞体験を提供する。②作品のクリエイションの場をつくり、創作活動を推進する。③従来の観客だけでなく、特に子どもや社会的に舞台芸術に触れる機会の少ないコミュニティへのクリエイティブなアプローチを行い、地域の創客と拡充をはかる。これらの目標を遂行することで、地域での創作⇄上演⇄鑑賞を循環させ、持続的・継続的・有機的な舞台芸術の発展と地盤づくりを目指していきます。

また、数値目標としてはそれぞれに集客数目標及び予算の適切な執行を掲げています。

定性的な目標に対する結果は中長期的に推移を見守る必要がありますが、直近の観客の反応としては好意的な反応が得られています。また、『珈琲時光』のように国際共同制作事業が表現者にとって新たな出会いや創作の場となっており、事業実施後も継続した関係性を構築しています。こどもたちへのアプローチについても、回を重ねるごとに何度もシアターへ足を運ぶ子どもも存在しており、継続していくことの意義が確認できています。

先に記述した通り、地域との関係性を構築し、リピーターをつくり、舞台芸術公演の有用性への認知を築いていくことは、舞台芸術分野の継続発展に欠かせない要素であり、地域に根ざした公立文化施設の役割としては重要であると認識しています。

合わせて、地域の人材との交流の機会をつくることにより、アーティストや作品に新たな視座を付加する事が可能となり、作品を持ち込むことによってもたらす地域への変化も、創作活動を推進するクリエイティブな刺激であると捉えています。

定量的な数値目標に関しては、全ての公演において目標を上回る集客を実現しました。予算の収支においても、概ね予定通りの支出/収入を実現しています。

(793字)

## 【効率性】

### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

＜事業期間について、計画通りに進んだか＞

3事業ともに、単独公演ではなく他館との連携のもとに計画実施しています。連携館及び招聘カンパニーが足並みをそろえ、協力しながら制作進行する必要があり、担当者との信頼関係と協力により、お互いの組織の事情を乗り越えながら計画を進めていきました。その結果、契約、旅行手配、舞台技術、チケットティング、広報、運搬手配、といった一連の制作業務について役割分担し、互いの知見から最適解を見出し、最も効率の良い方法をとることができ、省力化、効率化、経費削減が可能となりました。

＜事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか＞

当館シアターは客席数が90席前後であり、1席当たりの経費効率は良くありませんが、翻っては、観客にとって舞台と客席が近距離での鑑賞体験となり、より充実したインパクトのある体験が可能となります（アンケート参照）。数量より鑑賞の質を上げていくことにより、中長期的には地域や人材の文化的な醸成に寄与していくことを目指しています。今回も、補助を得て実現した事業の機会を最大限に活かすべく、地域へのアウトリーチを実施しています。（479字）

## 【創造性】

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

人口およそ46万人規模の地方都市・金沢では、海外の同時代の舞台芸術を見る機会は極めて限られています。3本の事業は、地域の中だけでは普段見えてこない国際的な視点や価値を発見させてくれました。

例えば、舞台『珈琲時光』は、三重を拠点とする第七劇場と台湾のShakespeare's Wild Sisters Groupによる国際共同製作であり、東京、台北（新北）、三重、金沢の4都市で公演しました。その意義は、地方が連携して東京という「中央」を経由せずに海外と直接つながり、長い期間をかけて作品を丁寧につくり、「中央」である東京を含むワールドツアーを成し遂げたということです。国際的であり、かつ東京では観ることのできない舞台作品の価値をつくり出すことができ、地方や地域のもつ創造性の可能性を実感しました。

「今回上演された舞台『珈琲時光』には三重、金沢、静岡、台北を拠点とする俳優たちが参加している。「首都」を経由しないからこそ、「国と国」の関係でないからこそ築くことができる関係。ともに珈琲を飲むこと。時には言葉も交わさずに、同じ空間で、同じ身体をもつことを感じながら。そこで醸成された親密で繊細な関係は、今日の世界において舞台芸術が果たす役割を実感させてくれるものでもあった。」

（横山義志「舞台『珈琲時光』の繊細さについて」、「intoxicate」vol.137）

また、当館は海外にも注目される現代アートの美術館ということで、助成を受けて舞台『珈琲時光』には英語字幕をつけました。日本語中国語圏以外の人にも美術館で舞台芸術を鑑賞できる環境を整えるとともに、舞台上では日本語、中国語、台湾語、広東語が飛び交い、字幕では日本語、中国語、英語が表示されるというマルチリンガルでボーダレスなアジアの「現在」を反映した演出にもなりました。（763字）

## 【創造性】

### 自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

ダンサー・振付家の伊藤郁女はアウトリーチで地域の小学校でワークショップを実施しました。その後、このワークショップに参加していた女兒は伊藤に励ましを受け、後日、金沢で実施された別作品の公演の主要な役にキャストイングされています。

『Chotto Desh』では地域の児童館に通う小学生を招いた上演とアフタートークを実施しました。地域の児童館とは7年前からダンスワークショップを実施するなどの交流があり、子供達も次の舞台を楽しむにしているという話を指導者の方から聞き及び、継続した関係を構築しています。

舞台『珈琲時光』では演出家と出演俳優を講師とした高校演劇部を対象にしたワークショップを行いました。

いずれも、次世代の実演芸術を支える人材や観客の育成を目的にしています。

またメインキャスト1名を石川県にゆかりのある舞台表現者から選ぶというワークショップ・オーディションも実施しました。参加者約40名のうちオーディションには18名が参加し、その中から金沢を拠点に活躍する俳優の西本浩明氏が選ばれました。西本氏はメインキャストとして、三重や台湾でのリハーサルに参加し、東京、台湾、三重、金沢の4都市公演に出演しました。そこで得た経験やネットワークが今後の西本氏の活躍とともに地域の実演芸術の振興につながることを期待しています。

3つの事業で実施した出演者や演出家、ゲストなどによるアフタートークは、観客にとって鑑賞体験を言葉にして残す時間やヒントになるのだということを、寄せられたコメントの質の高さや量で思いいたしました。

舞台公演は多くの方に観てもらうことももちろん重要ですが、真に創造性のある作品というのは、誰か一人のためだけに届くように丁寧につくられたものであり、制作者も鑑賞者も意図しない何かが両者の間を結びつけることで新しいコミュニケーションの生まれることにこそ創造的価値があるということを改めて考えさせられました。（805字）

## 【持続性】

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

今年度、当館は開館15年を迎えます。当初より舞台芸術プログラムを実施しており、継続したプログラムを通して表現者や地域との関係性を構築していくこと、他館との情報交換や連携を行っていくこと等、日々の積み重ねによって独自性のあるコンテンツの展開や内容を深化させていくことが可能になります。

特に地域の表現者、クリエイター、市民との関係性は、公共施設の存在の根幹を支えるものであり、施設を運営するにあたって年々重要度を増すものと考えます。

過去のシアター事業に来場されている観客の推移を観察する中で、特に子どもや社会的に舞台芸術に触れる機会の少ないコミュニティへのクリエイティブなアプローチを行うことで創客、創作環境づくり、鑑賞環境づくりのサイクルを作っていくことが当面の重点課題であることを導き出しました。

そのため、2019年度は次世代の観客やクリエイターを生み出すための、子どもから高校生をメインターゲットとした内容を意識したプログラミングを行っており、中長期的な取り組みをスタートしました。一例として、2019年ゴールデンウィーク期間中は「ようこそ！こどもシアター」を実施し、6日間の開催期間中、5つのシアタープログラムを実施し、延べ観客数790名（達成率117%）となりました。下半期には当館では上演が叶わない大劇場のダンスや演劇公演を日帰りで見学に行く、高校生を対象とした「劇的バス遠足（仮題）」を計画しています。

また、地元で執筆活動を行っている「北陸の劇評」のメンバーと協働して、平成30年度に当館で実施した舞台公演についての劇評を書いていただきました。これは地域における劇評の機会を増やし、「見る目」のある観客を長期的に育てていくことにつながると考えます。

今後とも持続可能な、発展し続けるプログラミングを、多角的な視点から実施していきます。（774字）